

原著論文

領域「表現」と初等図画工作科指導法の接続に関する基礎的研究 ～初等教育図画工作専科の教員によるアンケート調査から～

Basic Research of the Connection between “Expression” in Early Year Education and “Art and Handicraft” in Elementary School Education: Based on the Questionnaire Survey to the Arts and Handicrafts Teachers in the Elementary School

椎橋 げんき (白百合女子大学) 大貫 麻美 (白百合女子大学)
Shiihashi Genki (Shirayuri University) Ohnuki Asami (Shirayuri University)

幼児期から、身近な環境に働きかけ、自らの責任で判断や選択をしながら創造的な活動を行うことや、その活動による達成感を実感していくことにより、Student Agencyの重要な基盤が構築されていくと考えられる。身近な環境へ主体的に関わる創造的な活動であり、幼児教育と小学校教育との円滑な接続に資する可能性が高い活動のひとつに造形遊びがある。小学校教諭が幼児期の造形遊びをどう捉えるかは、その接続可能性に大きく影響を与えうる。そのため本研究ではアンケート調査から、小学校教育実践者3名が幼児の造形遊びを観察した際に持つ気付きを分析した。その結果、遊びを通じた学びの存在、幼児の発達段階、遊びの発展性に関してそれぞれに具体的な気付きがあった。一方で、観察した幼児が布を用いて行う遊びの展開や、その遊びを通して行われる学びの過程に関する理解には、一定の課題があったことが示唆された。

1. はじめに

21世紀に入り、大きく、また急速に生じている社会の変化に伴い、教育のあり方についても議論が国内外でなされている。平成29年に告示された現行の小学校学習指導要領の改訂に先立ち、中央教育審議会(2016)は、「2030年とその先の社会の在り方を見据えながら、学校教育を通じて子供たちに育てたい姿」のひとつとして、「変化の激しい社会の中でも、感性を豊かに働かせながら、よりよい人生や社会の在り方を考え、試行錯誤しながら問題を発見・解決し、新たな価値を創造していくとともに、新たな問題の発見・解決につなげていくことができること」を挙げている。こうした姿はそれ以前から示されていた「生きる力」の捉え直し、更なる具現化を迫ったものであると言えよう。

国際的に見ると、OECD Future of Education and Skills 2030プロジェクトが2030年に向けた学びのあり方について、Learning Compass2030を発表している(OECD, 2019)。学びの「羅針盤」という表現には、学習者が「教師の決まりきった指導や指示をそのまま受け入れるのではなく、未知なる環境の中を自力で歩みを進め、意味のある、また責任意識を伴う方法で、進むべき方向を見出す必要性を強調する目的」がある(OECD, 2019: 2020 仮訳版)。そのため、この「羅針盤」をもつ学習者自身の「Student Agency」の重要性も同時に示されている。「Student Agency」は、学習者が「自分の人生や周りの世界に対してポジティブな影響を与えうる能力と意志を持っている」という原則に基づきながら、「変革を起こすために目標を設定し、振り返りながら責任ある行動をとる能力」として定義づけられている。即ち、「責任を持った判断や選択を行う」主体者たることが学習者に求められていると言える。さらに他者との関わりの中においては、「Co-Agency(共同エージェンシー)」も重要になってくる。責任を持って判断や選択を行い、よりよい社会の構築に参画していくことのできる資質や能力の育成は、一朝一夕にはなしえず、幼児期からの継続的な涵養が期待される。中央教育審議会(2021)は、目指すべき「令和の日本型学校教育」の姿を「全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適

な学びと、協働的な学びの実現」としている。そして、幼児期の教育には、「小学校教育との円滑な接続」や「質の高い教育が提供され、良好な環境の下、身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で達成感を味わいながら、全ての幼児が健やかに育つことができる」ようにすることなどが求められている。幼児期から、身近な環境に働きかけ、自らの責任で判断や選択をしながら創造的な活動を行うことや、その活動による達成感を実感していくことにより、Student Agencyの重要な基盤が構築されていくと考えられる。

身近な環境へ主体的に関わる創造的な活動のひとつに造形を通した遊びがある。椎橋ら(2020)や椎橋ら(2022)では、乳幼児がクラフト紙と関わる活動において、乳幼児の行動にプログラミング的思考の萌芽が見られたことを報告している。池田ら(2019)は幼稚園の遊びと小学校の造形遊びの共通点に着目し、小学校で構想される授業形式の造形遊びを幼稚園で実施することを試みている。また、成城学園初等学校(2023印刷中)では、小学校図画工作科の専科教員が幼児の造形遊びを観察したり、幼稚園教諭に聞き取り調査を行ったりして、小学校の図画工作科における「造形遊び」のアプローチとの共通性を見いだす様子などが報告されている。幼児教育と小学校教育との円滑な接続に資する可能性が高い造形遊びであるが、小学校教諭が幼児期の造形遊びをどう捉えるかは、その接続の可能性に大きく影響すると考えられる。そのため本研究では、小学校教育実践者に焦点を当て、小学校教育実践者が幼児の学びに関してどのような気づきを持つのか明らかにすることを試みた。

2. 研究の目的と方法

本研究では私立小学校の図画工作専科の教員(以下、小学校教員と記載する)の幼児期の学びに関する気付きについてアンケート調査から分析を試みた。調査対象となる小学校教員は3名(以下、それぞれをT1, T2, T3とする)。調査時の教員歴はT1が19年(内、高校2年含む)、T2が15年、T3が10年(内、中学校3年含む)である。本研究を行うにあたり調査対象となる小学校教員は全員「幼児期の子供の遊びを読み取ることは、小学校低学年での造形を通した遊びの理解にもつながること」や「造形を通した遊びを読み取ることができれば、幼小のつながりやその理解は深まること」(成城学園初等学校, 2023印刷中)に同意している。

研究方法は以下のとおりである。2021年3月に都内私立園A幼稚園の園児が行っていた布遊びを、観察した小学校教員に、観察した幼児の遊びについて質問紙による調査を行った。その回答について分析した。質問事項を表1に示す。それぞれの質問について得られた回答を分析した視点は、以下の通りである。

質問1では子どもが布と関わり遊ぶ中で、子どもの学びが感じられた印象的な場面とその理由を質問した。ここでは幼児教育の特徴である「遊びを通した学び」について言及している部分を抽出した。これを視点1とする。

質問2では、子どもが布と関わり遊ぶ中で、年長児の発達に合ったと思われる遊びとして、印象的な場面について質問した。ここでは「小学校教育につながる幼児期の学び」に言及している部分を抽出した。これを視点2とする。

質問3では、もう一度布の遊びを行うとしたら、どのような遊びを想定し、遊びが展開されると思うか。また、その際の環境設定などどのような点に気をつけるか、について質問した。ここでは小学校教員が「幼児教育者は子どもの遊びの展開や発展について見通しを持っている」ことに言及している部分を抽出した。これを視点3とする。

表1 小学校教員への質問事項と分析の視点

質問事項		分析の視点	
質問1	子どもが布と関わり遊ぶ中で、子どもの学びが感じられた印象的な場面とその理由。	視点1	遊びを通した学びに関する気付き
質問2	子どもが布と関わり遊ぶ中で、年長児の発達に合ったと思われる遊びとして、印象的な場面。	視点2	幼児の発達段階に関する気付き
質問3	もう一度布の遊びを行うとしたら、どのような遊びを想定し、遊びが展開されると思うか。また、その際の環境設定などどのような点に気をつけるか。	視点3	遊びの発展性に関する気付き

なお、小学校教員が観察した幼児の遊びは以下の通りである。

普段は屋内でしか使用していない素材である布が園庭各所に配置され、幼児は自由に遊べる環境であった。布は、幼児にとって形を変化させることが容易で、結ぶ、身にまとう、引っ張り合うなど、様々な遊びを誘発できる素材である。A 幼稚園の幼児は日常的に屋内で風呂敷ほどの大きさの布を用いた自由遊びを行っている。一方、今回、小学校教員が観察した活動場面では、1m 幅に対しておよそ 5m, 3m, 1m の長さの布が、幼児一人一人に充分行き渡るよう用意され、園庭各所に配置されていた。従前では、屋内であった活動の場が屋外になるという環境の違いや、大きさが異なる布が複数あることから、幼児の自由遊びに発展が見込まれる場面であった。幼児は 5 歳児クラス合計 40 名（各 20 名、2 クラス）であった。

観察序盤は布を使わない普段の園庭遊びのみが展開されていた。その後活動の中盤に、ある園児が布を手にして園庭を走る姿がみられるようになった。その姿を他の園児も見て次々と複数の園児が布を手にするようになった。その後、布を用いた遊びに見られた行為は、手に持ち走るの他に、引っ張り合う、遊具にひっかける、身に纏うなどがあった。10 名程度の集団で引っ張り合う遊びを行うなど、幼児は場所や人と関わりながら遊び、展開していた。3 名以下の少数で遊んでいた幼児らは、遊具を使った遊びや身に纏う遊びを行っており、引っ張り合いをしていた 10 名程度の集団は遊びの時間が終わるまで継続して遊んでいた。遊びの時間、引っ張り合う遊びのみではあったが、子どもそれぞれ感じたことを話したり、布の動きのコントロールを試みたりしていることから、引っ張る力や引っ張り合う場について、複数人で遊びながら学びを深めていっている様子が見られた。他の幼児が少数で行っていた遊びの展開は早く、遊びが変化するため、多様な遊びが確認された。

3. 結果と考察

小学校教員 3 名（以下、それぞれを T1, T2, T3 とする）に行った調査結果から、幼児の遊びに関する小学校教員の気づきを 3 つの視点（表 1）で分析した。

（1）遊びを通した学びに関する気づき

質問 1 「子どもが布と関わり遊ぶ中で、子どもの学びが感じられた印象的な場面とその理由」への T1 から T3 それぞれの回答を表 2 に示す。この回答から、小学校教員が、幼児期の学びは遊びを通して行われることに気付いている記述を抽出し、その内容を分析した（表 2 下線部）。

まず、小学校低学年の図画工作科の「A 表現」で扱われる「身近な自然物や人工の材料の形や色などを基に造形的な活動を思い付くこと」（文部科学省, 2017）の素地となる「特性を生かした活動」が幼児の造形遊びにあったことへの気づきがそれぞれの回答にみられた。

T1 は「布の変化を楽しむ。ゲーム性を探る」（下線部 b, c）という表現を用いていた。T2 は、幼児が布を使って「『むすぶ』『しく』、『広げる』、『くるまる』という」多様な遊びをしていること（下線部 h）に言及し、「特性を生かした活動」（下線部 g）と表現していた。また、T1 の「形に対応した布の活用」（下線部 e）、T2 の「素材の特徴をつかみ、更新させていく」（下線部 i）という表現や、T3 の「その子なりの工夫」（下線部 o）という表現からは、幼児の造形遊びに、小学校低学年の図画工作科で扱われる「感覚や気持ちを生かしながら、どのように活動するかについて考える」という発想や構想に関する学びとともに、「工夫して表す」といった技能面の学びの素地があることを見取っていた様子が示唆された。

また、T3 が回答した幼児が自分の制作物を「何人にも友達に紹介」する姿（下線部 n）や、T1 の示した「人間関係に展開」という表現（下線部 d, f）は、小学校低学年の図画工作科の「B 鑑賞」にある「自分たちの作品や身近な材料などの造形的な面白さや楽しさ、表したいこと、表し方などについて、感じ取ったり考えたり」することの素地になる学びがそこにあることを見取っていたと考えられる。

こうした図画工作科につながる学びに加え、他教科との横断的な概念の構築がなされていることを見取っている部分も見られた。具体的には、T1 は、子どもの布の枚数を数える姿を、数感覚が培われている場面として捉えていた（下線部 a）。これは幼児教育において「幼稚園教育要領解説」（文部科学省, 2018）に示されている領域「環境」に関わる内容であり、小学校算数科の A 区分「数と計算」の素地になる内容である。また、T3 は

造形遊びから「投げて遊んで」いる遊びに活動が変化していることに気付きを持っていた（下線部 k）。これは、領域「健康」に関わる内容であり、小学校体育科における学びの素地になるといえる。

さらに、T1 の「楽しむ」（下線部 b）、T3 の「満足げ」（下線部 l）や「満足し」（下線部 m）という表現からは、小学校低学年の図画工作科の目標にある「造形的な面白さや楽しさ」、「楽しく発想や構想」をすること、「つくりだす喜びを味わう」ことなどに関与する情意的な学びが幼児の造形遊びにあることに、小学校教員が気付いていたと考えられる。

表2 質問1「子どもが布と関わり遊ぶ中で、子どもの学びが感じられた印象的な場面とその理由」への回答

回答者	記述内容
T1	<u>（数）布の枚数を数える姿→数感覚を養う^(a)。（体）布で綱引き、はしる、投げる→布と体を使って→布の変化を楽しむ^(b)。ゲーム性を探る^(c)→人間関係に展開^(d)。（造）布で環境をつくりかえる→形に対応した布の活用^(e)→広げる→人間関係に展開^(f)。ものにかける→造形に迫る</u>
T2	素材（布）と関わり、その特性を生かした活動 ^(g) に取り組んだ場面。具体的には「むすぶ」「しく」「広げる」「くるまる」という ^(h) 姿を見取ることが出来た。それぞれ、自分の中でイメージを更新しながら取り組んでいた姿が印象的だった。布との関わりを自分事にしながら素材の特徴をつかみ、更新させていく ⁽ⁱ⁾ 姿に学びを感じることができた。
T3	<u>園児にとって「できること」と教師が「それをもとにできるだろうと思っていること」は違うのだと気付いた^(j)。丸めて結ぼうとしている子が、私に結んでと頼んできたのでやんわり断わると、何回かぐるぐると試行錯誤すると、最後には結ぶことができ、その丸めて結んだものを投げて遊んで^(k)満足げ^(l)な表情であった。なんで最初できないと思ったのか尋ねると「お弁当のときにやってるもん」と、お弁当のつつみとこの布が最初は違ったもの、もしくは同じようにできるか不安だったのでは、と推測される。そして、出来たもので満足し^(m)何回も投げては結び、何人にも友達に紹介⁽ⁿ⁾して投げ合うという活動に展開したと思われる。また、途中から角をあわせ、きちっとたたんでから結ぶようになった。それは投げた後、ほどけるのが嫌でなんとかほどけないようにしようとした<u>その子なりの工夫^(o)</u>だったのかもしれない。</u>

(2) 幼児の発達段階に関する気付き

質問2「子どもが布と関わり遊ぶ中で、年長児の発達に合ったと思われる遊びとして、印象的な場面」について、T1 から T3 それぞれの回答を表3に示す。この設問では小学校教員が、幼稚園の年長児の実態をどう捉えているか分析することを試みた。

「年長児の発達に合ったと思われる遊び」について質問が、それぞれの気付きの観点には差異がみられた。T1 は「感じたことや発見したことを『教える、伝える』場面」（下線部 p）、T2 は「友達と協力しながら遊ぶ場面」（下線部 q）を回答していた。上述したように、質問1で T3 は自分の制作物を友達に紹介する幼児の姿（下線部 n）に言及しており、全員が、造形遊びの過程で材である布との関わりだけではなく、幼児が他の幼児と関わり合いながら活動している様子をとらえていることがわかった。

一方で、T3 は、「年長児の発達に合ったと思われる遊び」としては、ある幼児が空間に関する立体的な感覚を持ち始めている様子（下線部 t）を回答していた。空間的な気付きは、小学校算数科における学びの素地にもなる感覚であるが、「感嘆の声をあげていた」（下線部 u）という表現から、幼児がその気付きを得たことは偶発的であったことが示唆される。また、T2 は、ある幼児の特性に言及しつつ、その子なりの学びへの気付きを述

べていた（下線部 s）。これらの回答は、幼児の発達段階には差異があることへの気付きであると考えられる。

表3 質問2「子どもが布と関わり遊ぶ中で、年長児の発達に合ったと思われる遊びとして、印象的な場面」への回答

回答者	記述内容
T1	布と関わる中で感じたことや発見したことを「教える、伝える」 ^(p) 場面があった。みんなで布を引き合い、布の中の友達を持ち上げる活動も見られた。
T2	友達と協力しながら遊ぶ場面 ^(q) 。つなひきやハンモックのように ^(r) 布を扱うこと。これは年長児ならではじゃないのかなと思った。Z児は他者との関わりを持つ機会は少なかったが、要所で関わろうとして声をかけたり、周りに近づいたりする ^(s) ように見取ることもできた。
T3	丸めて肩をしっかりと使ってなげる。広げて家に見立てる（平面）→遊具にひっかけ空間をつくる ^(t) （立体）。それ貸してよと聞きに行ったら、空間的に扱っている方は感嘆の声をあげていた ^(u) ので、その子にとっては空間、立体を感じた瞬間であったのでは。

(3) 遊びの発展性に関する気付き

質問3「もう一度布の遊びを行うとしたら、どのような遊びを想定し、遊びが展開されると思うか。また、その際の環境設定などどのような点に気を付けるか」へのT1からT3それぞれの回答を表4に示す。ここでは小学校教員が、幼児が行った今回の造形遊びの発展性について、どのような見通しを持っているかを明らかにすることを試みた。

この設問について、T1は布の大きさに関わる人数との関係に着目して回答をしていた（下線部 v）。T2は活動場所と活動内容との関係に着目して回答をしていた（下線部 x）。T3は、立体的な材の配置により活動が発展する可能性について回答していた（下線部 z）。それぞれが異なる視点であったが、今回行われた造形遊びが発展性のある活動であると肯定的にとらえた上で、新たな活動を提案している様子が見られた。

一方で、T2は環境を室内に変えることで全身を使った遊びが出来る（下線部 y）と想定していたが、質問1や2では、屋外で行われた今回の活動においても「つなひきやハンモックのように」布を使う姿（下線部 r）や、「くるまる」などの姿（下線部 h）が幼児に見られたことを回答しており、「T2自身もつ全身を使って関わる」ことのイメージが限定的になっていることが懸念された。また、T3は、回答文の末尾が疑問符（下線部 #）になっており、自分の提案に確信が持てていない様子が見られた。T1は今回の活動で扱われた布の大きさに関わる人数との関係性については、一定の確信を持っていたが、それがさらに大きなものとなった場合については「どのように布と人（園児）と関わるのかみてみたい」（下線部 w）という表現を用いており、確たる予想はないことが示唆された。

表4 質問3「もう一度布の遊びを行うとしたら、どのような遊びを想定し、遊びが展開されると思うか。また、その際の環境設定などどのような点に気を付けるか」への回答

回答者	記述内容
T1	布の大きさによって関わる人数が変わる ^(v) ため、さらに広い布を用意して、 <u>どのように布と人（園児）と関わるのかみてみたい</u> ^(w)
T2	同じ学年で行うのであれば、 <u>室内など環境を変化</u> ^(x) させる。それによって、布の色や素材に着目することが表れるのではないか。 <u>室内にすることによって全身を使って関わる</u> ^(y) ことが出来ると想定する。
T3	布を何枚か遊具や木に引っ掛けておく ^(z) と立体的な感覚の遊びに展開される？ ^(#)

4. おわりに

本研究では幼児の造形遊びを通した学びに関する小学校教員の気付きについて、「遊びを通した学びに関する気付き」、「幼児の発達段階に関する気付き」、「遊びの発展性に関する気付き」の3つの視点から分析した。

「遊びを通した学びに関する気付き」では、幼児が行っている造形遊びに、小学校図画工作科で扱う学習の素地になる学びがあるだけでなく、算数科や体育科とつながる教科横断的な学びの素地や、人間関係など情意的な学びもあることに小学校教員が気付いていることがわかった。「幼児の発達段階に関する気付き」については、幼児が他の幼児と関わり合いながら活動していることを全員が見取っていた。一方で、偶発的な学びや、個の特性に応じた学びがあることや、幼児のメタ認知には、幼児教育の実践者がもつ認識とのずれがあることも示唆された。「遊びの発展性に関する気付き」については、今回行われた造形遊びが発展性のある活動であると肯定的にとらえた上で、新たな活動を提案している様子が見られたが、今回行われた幼児の遊びの展開や、その遊びを通して行われる学びの過程に関する理解には、一部課題が見られた。

今回の調査結果は、私立小学校の図画工作専科の教員3名を対象とした小規模なものである。教員の専門性や低学年授業の担当歴などにより、結果が異なりうる。また、小学校教員らが「遊びを読み取るには発達の理解が不可欠といえる」（成城学園初等学校，2023印刷中）と指摘していることから幼児期の発達への理解について本研究で用いた視点を基にした分析などを継続的に行い、幼小接続に関する課題解決を目指すことを今後の展望とする。

謝辞

本研究に協力を頂いた成城学園初等学校の粟津謙吾教諭，秋山朋也教諭，橋本正裕教諭をはじめとする教員各位に謝意を表す。

注記

本研究は一部，JSPS No. 20K03281（研究代表：椎橋げんき）及びJSPS No. 22H01067（研究代表：大貫麻美）の助成を受けて行った。

引用文献

- 1) 中央教育審議会（2016）幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申），https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf（最終閲覧日 2022.11.23）
- 2) 中央教育審議会（2021）「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す，個別最適な学びと，協働的な学びの実現～（答申）https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt_syoto02-000012321_2-4.pdf（最終閲覧日 2022.11.23）
- 3) 池田吏志・新井馨・遠地千智・掛志穂（2019）幼稚園における遊びを取り入れた「表現」に関する実践的研究—小学校図画工作科「造形遊び」との共通性を踏まえて—，学校教育実践学研究，31-38.
- 4) OECD（2019）OECD Future of Education and Skills 2030 Concept Note: Conceptual Learning Framework LEARNING COMPASS 2030, https://www.oecd.org/education/2030-project/teaching-and-learning/learning/learning-compass-2030/OECD_Learning_Compass_2030_concept_note.pdf, 秋田喜代美・安彦忠彦・太田環・岸学・木村優・小村俊平・坂本篤史・下郡啓夫・下島泰子・柄本健太郎・時任隼平・奈須正裕・長谷川友香・花井渉・松尾直博・三河内彰子・無藤隆・文部科学省初等中等教育局教育課程課（2020）日本語仮訳，https://www.oecd.org/education/2030-project/teaching-and-learning/learning/learning-compass-2030/OECD_LEARNING_COMPASS_2030_Concept_note_Japanese.pdf（最終閲覧日 2022.11.23）
- 5) OECD（2019）OECD Future of Education and Skills 2030 Concept Note: Conceptual Learning Framework STUDENT AGENCY FOR 2030, <https://www.oecd.org/education/2030-project/>

teaching-and-learning/learning/student-agency/Student_Agency_for_2030_concept_note.pdf, 秋田喜代美・安彦忠彦・太田環・岸学・木村優・小村俊平・坂本篤史・下郡啓夫・下島泰子・柄本健太郎・時任隼平・奈須正裕・長谷川友香・花井渉・松尾直博・三河内彰子・無藤隆・文部科学省初等中等教育局教育課程課（2020）日本語仮訳, https://www.oecd.org/education/2030-project/teaching-and-learning/learning/student-agency/OECD_STUDENT_AGENCY_FOR_2030_Concept_note_Japanese.pdf (最終閲覧日 2022.11.23)

- 6) 椎橋げんき・大貫麻美・石沢順子（2020）幼児がクラフト紙を用いて遊ぶ過程に見られるプログラミング的思考の萌芽, 日本科学教育学会年会論文集 44,419-420.
- 7) 椎橋げんき・大貫麻美・石沢順子（2022）乳児のクラフト紙を用いた遊びに見られる論理的思考の整理—プログラミング的思考に関する発達段階の体系化をめざして—, 白百合女子大学研究紀要, No. 58.
- 8) 成城学園初等学校（2023 印刷中）幼初連携を念頭に置いた, 幼児造形活動と児童造形活動の研究, 2021 年度 成城学園教育助成研究報告書
- 9) 文部科学省（2017）小学校学習指導要領解説 図画工作編（平成 29 年改訂）https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387017_008.pdf (最終閲覧日 2022.11.23.)
- 10) 文部科学省（2018）幼稚園教育要領解説 https://www.mext.go.jp/content/1384661_3_3.pdf (最終閲覧日 2022.11.23.)

It is important for students to gain the basis of the students' agency through making decisions and making choices on their own responsibility, and realizing a sense of accomplishment from creative activities connected with surrounding environment from early years. Handicrafts activity is one of the creative activities that are proactively involved in the familiar environment and has a high possibility of contributing to a smooth connection between early year education and elementary school education. How elementary school teachers perceive handicrafts activities of early years greatly affects the possibility of the connection. In this study, it was analyzed that perceptions of elementary school art and handicrafts teachers(n=3) about early years' handicrafts based on a questionnaire survey. As a result, the following four viewpoints were found; Every teacher could mention about the learning through playing, the developmental stage of children, and progressiveness of the playing. On the other hand, it was suggested that there were some problems in the perspective of the development of the play using cloth and the learning process of early year children.